

東北文教大学・東北文教大学短期大学部 図書館報

発行 東北文教大学・東北文教大学短期大学部附属図書館 〒990-2316 山形市片谷地515 ☎023-688-7544

目次

- 天井裏から始まった学術情報…………… 1
- 教員の本棚から…………… 3
- 私のおすすめ本…………… 3
- 令和元年度 図書館報告 …… 4

天井裏から始まった学術情報

教授・附属図書館長 松田浩平

皆さんが図書館と言われて真っ先に連想するのは「本」であり図書としての書籍だと思います。ところが私は、本の文章を読むのが余り好きではなく、画像をはじめとして図形や数式などを眺める方が、いまでも好きです。それは趣味の一つに写真撮影があることにも関係するかも知れません。皆さんが、図書館を利用するのは、書架を見て読んでみたい書籍を探したり、何かを調べるための文献や資料を探したりすることが目的だと思います。また、地域の図書館は、だれもが生涯を通じて学び、自己の内面を磨くとともに、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたってあらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の構築を目指すため、図書館・博物館の活用を通じた住民の学習活動や個人と地域の自立支援の推進を図るために設置されています（出典：平成21年度 文部科学省地域の知の拠点・ネットワーク推進事業）。このため、地域社会や地域住民に役立つ学習や研究の拠点としての機能を果たすべく文部科学省では、「図書館機能を活用した『地域の知の拠点』づくり推進事業」及び「地域で輝く博物館連携推進事業」が、平成21年度から平成23年度に実施されました。これを受けて各地の自治体でも取り組みが行われ、山形県でも山形県立図書館が2020年2月1日にリニューアルされ、その式典で吉村美栄子知事は、『知の拠点として、多くの県民に愛される施設になってほしい』と挨拶しました。

公的な図書館は、設置の目的に沿って地域の知の拠点として機能することが求められます。これは大学附属図書館も同様ですが、その機能に加えて学生や教職

員の教育と研究に多様なメディアを通じて知的資源を提供することが求められます。さらに、大学附属図書館には、もう一つの重要な機能があります。それは大学の教育研究を支える学術情報センターとしての機能です。この機能は、過去の研究から最新の研究まで検索して参照し引用することが求められます。これらは、新しい教育や研究を立ち上げる上で欠かすことができない学術情報となります。このような理由で大学附属図書館は、大学等における「学術情報の拠点」とも言われます。

正直に申し上げますと私は学生時代にあまり図書館を利用したことがありません。それよりも学科の資料室に行って冊子になった論文を探していた記憶が残っています。しかし、先輩に蒲鉾という^{あだな}紳士の方がいました。その先輩は、いつも図書館で机にへばりつくように読書をしていました。色白な女性でしたので、赤い服と色白な体躯が板（机）にへばりついていることからそう呼ばれたそうです。当時は、書籍は図書館、論文は学科資料室や先生方の研究室という区分でした。ところが私が大学院を修了し大学で教職に就いて3年が過ぎた頃の1990年頃から、インターネットの普及で学会や学術出版社による電子ジャーナルが登場し始めました。さらに21世紀を迎えるころになると、その数は急激に増加し、論文の閲覧は冊子よりもインターネット経由が多くなり学会誌も急激に電子化が進みました。当初は試験的な運用でもあり無料でしたが、出版社の利益に繋がるため有料化され、そのため大学図書館が中心となって購読に向けた整備が進みました。大学院生の頃には購読するだけでも苦労した国

際誌に掲載された論文も手軽に読めるようになりました。

電子ジャーナルは、空間的・時間的格差が無く冊子に比べて迅速に提供されます。さらに、学術データベース機能として活用できますし、ハイパーリンク機能による関連論文の参照の迅速化もできます。それまでは、ヨーロッパやアメリカの主要な大学や研究機関に3ヶ月くらいの期間を要して問い合わせるか、現地まで出向き資料の閲覧やデータの照合などを行うしかありませんでした。費用も時間もかかり、まだ研究に充てられる予算が少ない大学院生や助手や講師にとって特別な研究予算や科研費などの外部資金を獲得できなかった不都合なことでした。研究予算の不足する状況ではありますが、まだ実績が無い萌芽的な研究を試みると予算獲得が難しく、資料や文献を入手することもままならない状況でした。そのような場合は、指導教員の伝を頼って海外の有名な研究者を紹介していただくか、紹介状を持参して現地に赴く以外の方法はありませんでした。

ところが、アメリカの研究機関では、1978年代頃から文字ベースでの学術情報がインターネットを搬送経路として利用され始めており羨ましく感じました。日本からアクセスするためには、KDD（国際電信電話株式会社）経由で、アナログ回線のモデムを利用してUUCP（Unix to Unix Copy Protocol）を使うしかありませんでした。当時の国産モデムの通信速度は2400bpsでしたが、最先端だったtelebit社のTrailBlazerは14400bpsと当時としては驚異的な通信速度でした。恩師である指導教員の研究室の天井裏に入ってTrailBlazerモデムを設置して誕生間もないJUNETに接続したのは1982年頃だったと記憶しています。その結果、あとで指導教員ともども大学から大目玉を食らいましたが、実験心理学者だった恩師が、情報系の教授を差し置いて新設された全学情報センター長に抜擢されたのも今では楽しい思い出になっています。その時代の私は、国際的な学術情報にアクセスしたい一心で誕生間もないインターネットにはまって本業である心理学の研究が少々おろそかになっていました。ミイラ取りがミイラになったような状況でした。そのような状況で、私が1990年に国際学会で研究発表した頃は、インターネット経由での資料取り寄せは二次情報のみで、内容を含む基礎資料となる論文冊子の取り寄せや、抄録をダブルスペースパイカピッチでタイプ印刷して国際郵便でおよそ1年前までに提出しなければならず、その後のやりとりも国際郵便を経由して行われました。準備だけで時間的にも物理的にも大変な思いをしました。大きな大学や組織でなければできないことでした。

しかし、2020年現在では1982年頃と比べ通信速度は約10万倍以上に向上し、通信速度あたりの価格も1万分の1以下の負担で、安価で高速なインターネット通信が利用できます。それらの情報を処理するコンピュータの能力は100万倍以上になりました。このよ

うな圧倒的な量的変化は質的变化ももたらしました。それまで、学術情報は研究室や学会の有志による奉仕活動に依存し一部の領域で好事家が利用する機能と見做されていました。それからまもなく、日本では1986年に学術情報センター（NACSIS）が設置され、1989年には（全米科学財団：NSF）との接続サービスも提供されるようになりました。さらに1992年にインターネット・バックボーンである（SINET）の運用が始まりJUNETが発展的に解消しインターネットを利用した学術情報の提供は公的サービスへと提供されるようになりました。ちょうどこの頃から大学や研究機関における図書館機能に学術情報が加わるようになり、その重みは年を追う毎に高まっています。大学によっては附属図書館予算の半分以上が学術情報関連であることも珍しくありません。さらに、インターネットを利用した各種のサービスは学術情報だけではなく、現在では日常生活や娯楽の中にも浸透し、データの連絡や生活情報のありかたまでを変えました。皆さんが日常的に使っているスマートフォンやタブレット端末もこのような背景を持っているのです。

学術情報サービスの拡大に伴いOn-line Journalのように紙媒体を利用しない学術誌も公刊されるようになり増加の一途をたどっています。しかし、数の増加は質の保証を低下させるという特性も持ち合わせています。学術雑誌の中にはハゲタカジャーナルや捕食出版（Predatory publishing）とも呼ばれ、投稿した論文原稿をまともな査読過程や編集過程を経ることなく、そのままオープンアクセスの学術誌で出版し高額な論文掲載料を徴収するという経済行為も増えています。従って、図書館の機能としてOn-line Journalに掲載された学術情報の質の評価や利用者への案内が司書の仕事として求められるようになってきていると思います。

本学図書館では、捕食出版であるかどうかをきちんと精査し管理している権威ある国際誌論文情報データベースであるEBSCO, Psycho Infoや国内誌論文情報データベースの医中誌が利用できます。皆さんは、図書館の端末や学内の端末から世界中の論文にアクセスできる時代に生きています。これらは通信速度やデータ処理能力の膨大な量的変化によってもたらされた質的な転換です。これからの大学教育においても授業資料に引用文献のデジタルオブジェクト識別子（DOI: Digital Object Identifier）が掲載できます。これによって教科書の記述などにみられる二次的情報を引用文献や資料という一次情報から簡単に検証できるようになりました。このような電子ジャーナルの普及と利用方法の拡大によって教育研究環境の地域格差がかなり縮小され、学術情報へのアクセス環境の整備は大学図書館の責務とさえ言えます。地方の小さな大学からでも国際誌にアクセスして世界の先端研究から知見を得て、国際学会で発表したり研究論文を投稿したりするなど活動に制約はなくなりました。皆さんも、図書館のもう一つの機能である学術情報センターとしての機能を勉学や研究に活用してはいかがでしょうか。

『ブリーフセラピー講義 太陽の法則が照らすクライアントの「輝く側面」』

若島孔文 著 金剛出版 2011.10 (146.8/ワカ 2F 一般書架)

私はこれまで様々な相談援助に携わるなかで、ブリーフセラピーという心理療法を使ってきました。それはブリーフセラピーが、数ある心理療法のなかでも、そのエッセンスを知るだけで誰でも使えるほどシンプルだからです。そこで今回は、『ブリーフセラピー講義』という本を通じて、ブリーフセラピーについてほんの少しご紹介したいと思います。この本はタイトルだけを見るとお堅い本のように感じられるかもしれませんが…良い意味で裏切ってくれる、とても読みやすい専門書です。例えば、この本では、ブリーフセラピーとは何かということを著者が偶然読んだ新聞記事から説明がされています。その記事は、ある娘さんがお父さんとお母さんの日常のやり取りについて投稿した次のような文章でした。

『お父さんがいつも家でパンツ一丁でいる。そして宅配がピンポンってきたら、お父さんがそのままパンツ一丁で出て行こうとするわけです。そこで、お母さんが何て言ったかという、こう言ったんですよ。「お父さん、パンツ一丁で、そんな格好で出て行っちゃだめでしょ！蚊に喰われるから!!!」…中略…娘さんが投稿した最後のオチっていうのは、「お母さん、そういう問題じゃないでしょ！」っていうことでした。』

著者はこの奥さんの対応がブリーフセラピーで使われる技術と同じであると説明しています。普通の奥さんであれば、「そんな格好してみっともないからズボンぐらい履いてよ!!!」と言ってしまい、夫婦が険悪なムードになってしまうところ、この奥さんは「蚊に刺されてはいけない」という旦那さんに対する心配を伝えることで、旦那さんにズボンを履かせようとしているのです。私たちは、問題と他者の行動を止めさせたいと思って叱咤に取った行動により、その場の雰囲気が悪くなってしまうことを日常のなかでよく経験します。しかしこの例のように、ブリーフセラピーを日常の対人関係に使うと、問題と思われる他者の行動を、険悪な雰囲気にならずに、変化（改善）させていくことができるのです。このようにブリーフセラピーは、カウンセラー等の援助職に携わる人に限らず、保育や教育現場から、プライベートの家族関係や友人関係まであらゆる場面で活用していくことができ、そのエッセンスを知るだけで必ず皆さんの役に立つものと思っています。

ここまで読んで頂き、ブリーフセラピーに少しでも興味をもたれた方に、この本を手にとっていただければ幸いです。この本には、ブリーフセラピーのエッセンスが、パンツ一丁のお父さんの例のように、クスッと笑える内容とともに詰まっておりますので、読めば色々な意味で元気が出てくること間違いなしです。



図書館学生アルバイトの「私のおすすめ本」

平田 智尋 (子ども教育学科1年)

『和菓子のアン』

坂本司 著 光文社 2010.4 (913.6/サカ 1F 一般書架)

和菓子はお好きですか？私は大好きなのですが、和菓子が好きな人もそうでない人にもお勧めの一冊です。

和菓子屋「みつ屋」でアルバイトを始めたアンちゃんが主人公。プロフェッショナルだけど個性的すぎる店長や同僚。彼らと日々せせと和菓子を買って行きますが、たまに気になるお客さんがやってきます。和菓子の名前や成り立ちにまつわる小さな謎がちりばめられており、和菓子を通して謎を解いていくおもしろい美味いお菓子なミステリーとなっています。

言葉遊びや駄洒落、歴史的文学の背景のある和菓子の奥深さに感動し、読み進めていけばいくほど和菓子の魅力に惹かれること間違いなしです。

ミステリーの要素はもちろんありますが、どれも人を傷つけない切なくも心温まり、読んでいるとものすごく和菓子が食べたくなる一冊です。私も、読み終える前に、和菓子屋さんに行って上生菓子を買って美味しく頂きました。皆さんも是非読んでみて下さい。



齋藤 怜奈 (総合文化学科1年)

『誰も知らない世界のことわざ』

エラ・フランシス・サンダース 著 創元社 2016.10 (388.8/エラ 2F 一般書架)

この本は、世界の色々なことわざが載っています。例えば、ポルトガル語で「ロバにスポンジケーキ」ということわざがあります。そのことわざは、「そのものの価値や本来の扱い方をわかっていない人、それを得るに値しない人に何かを与えることの無意味さ」ということを意味しています。日本にも似たような意味のことわざで「猫に小判」があります。同じ意味なのに、その国の文化によって全然違う言葉になっているのが面白いと思いました。国によって身近な動物が違い、ことわざにも違いが出てくることが分かります。

この他にも、様々な言語のことわざがあり、何となく意味が分かりそうなものから全く予想がつかないものまであります。どんな意味なのか詳しく解説も書いてあるので、とてもタメになります。

ことわざを通して、どうしてそういう言い回しになったのか、他の国の文化についても知りたくなってきました。ぜひ一度、読んでみてください。



上記の図書は図書館で所蔵しています。ぜひご利用ください。

令和元年度 図書館報告

資料の構成

(令和2年3月31日現在)

1. 図 書	蔵書数	126,112冊
	年間受入冊数	946冊
2. 雑 誌	所蔵雑誌 種数	250種 (内国誌 206種, 外国誌 44種)
	年間受入雑誌 種数	141種 (内国誌 131種, 外国誌 10種)
3. その他	新聞 種数	16種 (内国誌 12種, 外国誌 4種)
	視聴覚資料 所蔵数	1,278点
	データベース	Academic Search Elite, PsycINFO, 聞蔵, 河北新報データベース, 山形新聞記事データベース, MAGAZINE PLUS

利用状況

【利用概況】

入館者数については、「子ども教育学科」は減少しているのに対し、「短期大学部」全体では増加している。特に「子ども学科」の利用増が目立つ。一年を通して「授業利用」されていることが大きな要因と考えられる（他学科は4～6月に集中、以降はほとんど利用されていない）。貸出冊数・人数は、「総合文化学科」を除き増加傾向にあるも、ほぼ例年なみの状況である。年間の利用傾向では、入館者数が前期に比べ後期の利用が大きく減少しているのに対して、貸出冊数では前期と後期でほとんど変化がない。図書館を利用する学生の固定化傾向がみられる。貸出ランキングでも授業利用や授業内で紹介されたものが上位にきていることや「子ども学科」の利用増加等から、授業との連携をいかに強化していくかが、図書館利用活性化のための今後の課題となる。

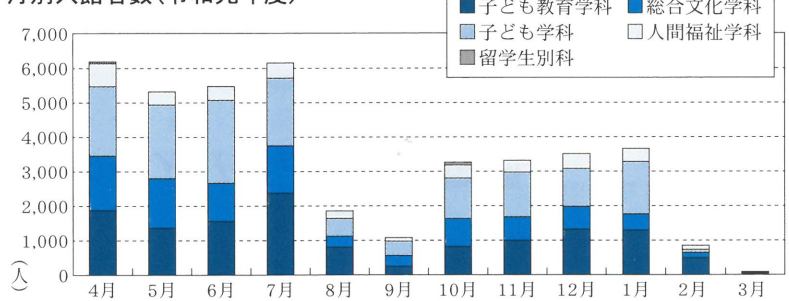
●入館状況

一日平均入館者数

参 考

	令和元年度 (人)	利用率 (%)	平成30年度 (人)	利用率 (%)
子ども教育学科	52	14	55	17
総合文化学科	36	32	32	32
子ども学科	58	28	46	22
人間福祉学科	15	23	21	30
留学生別科	1	20	1	7
短大合計	110	28	100	25
計	162	22	155	21

月別入館者数(令和元年度)



●館外貸出状況

(1) 学科別館外貸出状況

参 考

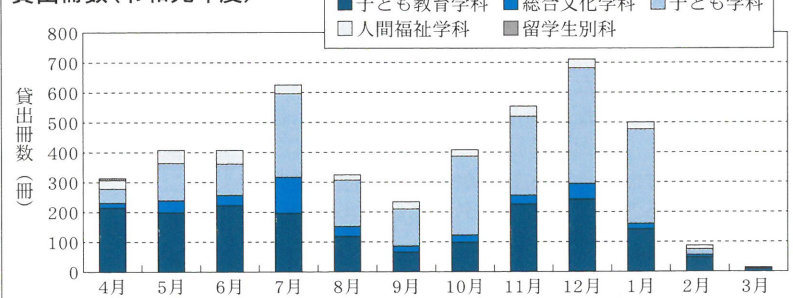
	令和元年度	平成30年度	平成29年度
子ども教育学科 (冊数)	1,784	1,491	1,834
(人数)	938	876	1,049
総合文化学科 (冊数)	407	422	564
(人数)	235	237	324
子ども学科 (冊数)	2,081	1,832	1,816
(人数)	1,181	1,044	950
人間福祉学科 (冊数)	323	273	185
(人数)	142	114	103
留学生別科 (冊数)	5	16	16
(人数)	5	12	9
合 計 (冊数)	4,600	4,034	4,415
(人数)	2,501	2,283	2,435

(2) 一人当たりの年間貸出冊数推移

参 考

	令和元年度	平成30年度	平成29年度
子ども教育学科	5冊	5冊	6冊
総合文化学科	4冊	4冊	5冊
子ども学科	10冊	9冊	9冊
人間福祉学科	5冊	4冊	2冊
留学生別科	1冊	1冊	3冊
本学平均	6冊	6冊	6冊

貸出冊数(令和元年度)



●その他のサービス提供状況

1. 相互協力業務

図書借受	6冊
図書貸出冊数	1冊
複写取寄件数貸出冊数	134件
複写提供件数貸出冊数	3件

2. 学内文献複写 複写枚数 613枚

3. 学内参考業務 受付件数 142件